

# 琉球弧と海底遺跡をめぐる話題

海底遺跡にロマンを求めて

沖縄県知事 稲嶺 惠一

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

この度、「琉球弧と海底遺跡をめぐる話題」についてシンポジウムが開催されるにあたり、一言コメントを述べさせていただきます。

与那国島沖の通称「海底遺跡」は、長年、漁民の間で語り継がれていたその存在を、木村政昭教授を中心とする琉球大学の調査団による調査結果により、マスコミで報じられたことから、一挙に世間の注目を浴びることになりました。

私も昨年9月に、広報・広聴で与那国町を訪れた際に、グラスボートで見学をいたしました。当日は波が穏やかで透明度も非常に良く、じっくりと見ることができました。

眼下に現れた海底遺跡は、まさにロマンをかき立てる情景で、メインテラスを中心とした壮大で神秘的な景観を楽しむことができました。

私の想像力はさらに大きく翼を広げ、この遺跡を築いた古の人々や沖縄に今に伝わるニライカナイ信仰のことに及びました。

この「海底遺跡」については、まだ解明されていないことも多く、人工物

であるのかないのか、また、人工物だとしても建造年代や利用目的などについて諸説ありますが、この景観は見る者に畏敬の念を抱かせ、ロマンをかきたてる魅力にあふれております。

沖縄近海には、この与那国島沖の「海底遺跡」をはじめ、ストーンサークルとされるものや海底鍾乳洞などが点在しており、学術的に重要なものが多いと聞いておりますが、観光資源としても非常に魅力のあるものと思います。

今後、これら沖縄近海の海底遺跡のロマンがさらに広がり、学術的にも調査が進むことを心から期待します。

終わりに、このシンポジウムにおいて活発な議論がなされ、その成果が更なる研究と地域での取り組みの強化に繋がることを祈念いたしまして、簡単ではございますが私のコメントとさせていただきます。

## 与那国海底遺跡の観察 毛利衛（日本科学未来館長）

2002年11月中旬、NASAの無重力訓練でマスターしたダイビング技術をもって、与那国の澄んだ海中に潜りました。2001年から館長をつとめる「日本科学未来館」で上映するための、与那国島海底遺跡の映像収録が目的でした。そして、冷静な目で海底遺跡の細かい構造を観察しました。その結果、やはり地質学のプロが指摘するように、私も自然の岩盤地形に人間が改造の手を加えた石造物だという印象を強くうけました。垂直な壁や水平なテラス、コーナー部分の鋭い切れ方、そして全体的な建物としての配置構造は、すなおな感想として自然状態で出来たものとはとても思えません。

与那国島海底遺跡のなかでもっとも有名な「第一遺構」は、東西約270m、南北120m、高さ26mほどの巨大神殿のような石造物である。それが上部をわずかに海面にのぞかせ、すっぽりと海中に沈んでいる。1986年に島の南側海底で発見され、10年前から琉球大学理学部の調査隊（琉大海底調査団）が現地調査をくり返してきた。2002年には、3月と11月の2回にわたって大規模調査を実施。日本科学未来館の撮影チームは、その潜水調査シーンを収録しました。映像的な美しさと迫力という点でも、この海底遺跡は科学未来館の大型ドームシアター“ガイア”で上映するのにうってつけの題材なので、2003年春以降の公開に向けて編集作業を進めていく予定です。

ただし、この不思議な遺跡が、沖縄地域だけの自然環境や歴史に結びついたものなら、番組企画には選ばなかったと思います。今は海底に沈む与那国島の古代建造物には、地球全体規模の気候変動と生活環境変化という大きな科学的テーマが秘められています。それが、多くの人たちに海底遺跡を紹介したいポイントであります。

私の言う大きな科学的テーマとは、海底遺跡が陸上で作られた年代と、それが沈んだ理由をさしています。琉大調査団は海底遺跡のさまざまな部分に付着したサンゴ化石などを採取し、遺跡建造年代を化学測定してきました。そして2002年に1万～8千年前頃という結論がでました。そして遺跡が沈んだ理由は、急激な“地殻変動”と“海面上昇”が考えられるが、調査の結果、海面上昇が原因だったこともわかりました。

では、なぜ海面上昇が起きたのか？ 簡単に説明すると、今から1万5～6千年前の氷河期に気温がもっとも下がった頃、地球上の水の多くは陸上で氷雪になり、海面は百数十mも下がっていた。やがて氷河期が終わって気温が上がると、氷雪が溶けて海面も上昇した。そして1万～8千年前頃の海面は、今よりも40～50m低い位置にあった。つまり、

この頃に与那国島では、人間が海辺の岩山を巨大建造物に造り変えた。ところが、8千年前以後に気温上昇は加速化し、海面も上がり続けた。7千年前頃には今と同じ高さまで海面が上昇したので、与那国島の石造物は完全に海中へ沈んでしまった。そして気温上昇は5～6千年前にピークに達し、海面は今より4～5m 高い位置にまで上昇。それからゆるやかに気温が下がり、現在の海面位置にもどった。

ご存じのように、今われわれはふたたび地球温暖化と海面上昇の問題に直面しています。つまり現代文明も、やがては海に沈む可能性があるということを、与那国島海底遺跡は物語っています。そしてもうひとつ、ムー大陸伝説など、未知の古代文明が海底に眠っているというロマンに満ちた物語が世界各地に残っていますが、海面変動は地球全体で同時に進行したので、他の地域にも与那国島と同じ年代の海底遺跡が沈んでいても不思議はないはずです。与那国島海底遺跡の研究調査は、そうした次の新発見につながる糸口にもなるでしょう

2003年1月24日版

## シンポジウム「琉球弧と海底遺跡をめぐる話題」

### プログラム

琉球大学・沖縄地学会共催、日本科学未来館・沖縄タイムス社後援

開催年月日： 2003（平成15）年1月25日（土）～26日（日）

場所：琉球大学複合棟一階講義室（コ102号室）

参加資格問わず、参加費無料。講演予稿集実費販売予定（2,000円）。

趣旨： 2001年には、琉球弧と生物の渡来という点に主眼をおいて、地学者と生物学者との議論を深めました。一方で、琉球列島の海底遺跡調査もすすみ、本年は文部科学省の大学教育研究重点化経費および日本科学未来館の協力で水中ロボットを用いての与那国海底調査が行われました。それら成果や沖縄県はじめ地元の取り組みをふまえて、地学者と考古学をはじめとした専門家との議論を深めることを目標としました。ここでは、人間活動の場としての海底という目で、新たに問題提起を行いたいと思います。一般参加者の協力も仰ぎ、理解の輪を広げることができればありがたいと思う次第であります。

世話人 木村政昭（琉球大学理学部物質地球科学科）、大城逸朗（沖縄県立石川高校長、沖縄地学会書記長）、石井輝秋（東京大学海洋研究所）

連絡 木村政昭 電話（=ファックス）：098-895-8566、

E-mail：kimura@sci.u-ryukyu.ac.jp

#### ○発表者

#### 第1日目 1月25日（土）

総合司会 古川雅英（放射線医学研究所）

10：00—10：10 挨拶 野原朝秀（沖縄地学会長、琉球大学名誉教授）

座長 辻維周（太平洋学会研究員）

10：10—10：40 海と文明 ○奈須紀幸（元東京大学海洋研究所長、東京大学名誉教授）

10：40—11：10 日本の水中考古学 ○茂在寅男（元日本水中考古学会副長、

東京商船大学名誉教授)

11:10-12:00 琉球弧とヒトの移動 ○小田静夫 (東京都教育庁学芸員)

12:00-13:10 昼食 (弁当希望者は朝の受付時に注文をとる、500円?)

座長 古川雅英 (放射線医学研究所)

13:10-14:30 与那国の海底遺跡調査—水中テレビロボを導入して ○木村政昭 (琉球大学理学部教授)・琉球大学海底調査団

14:30-14:50 与那国海底遺跡の観察 ○毛利衛 (日本科学未来館長)

14:50-15:00 与那国海底遺跡の見学記 ○稲嶺恵一 (沖縄県知事)

15:00-15:20 ティータイム

座長 中村衛 (琉球大学理学部)

15:20-15:50 太平洋圏の遺跡・水中遺跡 ○辻維周 (太平洋学会研究員)

15:50-16:20 トウグル浜遺跡の年代測定とその意義 木村政昭 (琉球大学理学部)、安里嗣淳 (沖縄埋蔵文化センター長)、中村俊夫 (名古屋大学年代測定研究センター助教授)、杉山真人・○松浦暢昌 (琉球大学理学部)

16:20-16:25 トウグル浜遺跡の石器の質について ○新城竜一 (琉球大学理学部助教授)、杉山真人 (琉球大学理学部)

16:25-17:00 自由討論 (会場よりの討論歓迎)

17:00-18:00 懇親会 (同会場、1,000円受付時に徴収)

## 第2日目 1月26日(日) (琉大理学部複合棟102号室)

座長 藤田和彦 (琉球大学理学部)

10:00-10:30 海底遺跡の炭素年代測定 中村俊夫 (名古屋大学年代測定研究センター助教授)、杉山真人・○市川逸土 (琉球大学理学部)

10:30-11:00 表面照射年代測定法によるサンニヌ台および遺跡ポイントの露出年代測定 松崎浩之 (東京大学原子力総合研究センター助教授)、植田三恵・○坂本理子 (琉球大学理学部)

11:00—11:30 与那国海底鍾乳洞に付着する Lime mud 沈殿物 ○山本聡（琉球大学理学部教授）、長井孝一（琉球大学理学部助教授）、小野朋典（琉球大学理学部）、杉崎彩子（東海大学海洋学部）、照屋潔（琉球大学理学部）

11:30—12:00 沖縄の石造階段のスケールについて ○小倉暢之（琉球大学工学部助教授）

12:00—13:30 昼食

この間

13:00—13:30 沖縄地学会総会（複合棟2階ゼミ室）

司会 瀬名波任（沖縄県立総合教育センター、理科研究科主任研究主事）

座長 坂本理子（琉球大学理学部）

13:30—14:00 海底下及び陸上地下探査法 ○太田洋一（水中地中探査研究会会長）

14:00—14:30 海底遺跡と古代文明 ○有賀馴（ジャーナリスト、古代史研究者）

14:30—15:00 与那国島海底遺跡保護に関する地元のとりくみについて  
○与那覇仁一（よしかず）（与那国町観光課）

15:00—15:20 ティータイム

座長 大城逸朗（沖縄地学会書記長、県立石川高校校長）

15:20—15:50 伝承と古代史 ○Celine Shinbutsu（エッセイスト）、北條幸男、久世深雪（美術研究者）

15:50—16:00 与那国海底遺跡と石垣島のグラニットポイントの岩石  
○石井輝秋（東京大学海洋研究所助教授）、柳下芳輝（琉球大学理学部）

16:00—16:20 玄界灘の沖ノ島海底遺跡の考証 ○吉田信啓（日本ペトログラフィ協会会長、サバント研究所教授）

16:20—16:55 全体ディスカッション（会場からの質疑歓迎）

16:55—17:00 挨拶 平良初男（琉球大学理学部長）

終了

-----  
ポスターセッションほか

- ・ 与那国島海底遺跡ポイントの実測形態図。琉球大学海底調査団、千原卓也
  - ・ シーバットおよび潜水調査による海底地形図 琉球大学海底調査団、朝日航洋
  - ・ 海底写真 ○新嵩喜八郎、和泉用八郎、平城徳浩
  - ・ 遺跡ポイント模型、遺物展示 ○琉大海底調査団
  - ・ 海底遺跡の水中ロボットおよび水中写真撮影 ○倉田耕治（琉球大学工学部助教授）
  - ・ 与那国海底遺跡観察記 ○橋谷博子（琉球大学公開講座受講生）
  - ・ 海底遺跡・遺物写真 ○日本シネセル資料
  - ・ 最近の海底遺跡をめぐる話題。沖縄県行政側の見解（新聞記事）、海底遺跡論争新聞記事：安里嗣淳：新嵩喜八郎
  - ・ 海底遺跡保護条例について 山田文比古（外務省）
- 
- ・ ビデオ上映（各昼休み）

備考

- \* ポスターセッションは、全体で畳一畳ほどのベニヤ板数枚を用意します。
- \*\*シンポジウム配布資料については、予稿集を作って実費で配布する予定です。
- \*\*\*本シンポの成果については、予稿集をもってかえたく思います。講演・ポスター関係者の予稿集原稿の協力お願いいたします。